

を教えこんだ」。この訓練が地理的理由と相まって多くの亡命者をひきつけ、その彼らがジュネーヴばかりでなくヨーロッパ・プロテスタントにとっても大きな役割を果たすことになる。著者の計算によれば、ジュネーヴは「一五五〇年と一五六二年の間に少なくとも七〇〇〇人の移住者を受け入れ」た。市政府の中心をなす小議会は亡命者には閉ざされており、政治的影響力は殆どなかったが、聖職者、教授、印刷業者など知的職業の代表的なものは彼らがほぼ独占していた。ジュネーヴの教会は彼らによって担われ、また「神聖な都市」としてのジュネーヴの名を広めたのも彼らであった。さらに、独立を守るためにも貢献した。彼らはカルヴァン死後徐々に生粋のジュネーヴ人と同化し、カルヴァン時代の遺産を後々までも伝えることとなる。このように、カルヴァンのジュネーヴへの、さらには全ヨーロッパへの影響という問題を亡命者集団を媒介としてとらえ、彼らの働きを高く評価していることが、本書全体を通じての大きな特徴となっている。

以上簡単に内容を紹介したが、カルヴァン時代のジュネーヴ全般にわたっての概説

書としての性質上、個々のテーマについては、たとえばカルヴァン派とペラン派の対立点及びそれと国家と教会の関係など、十分に展開されていないところもみうけられるが、カルヴァンを特に専門とはしない紹介者などにとっては益するところ多い。

この訳書の出版を機会に、我国においても、カルヴァンばかりでなく、ジュネーヴ史についても研究がすすめられることを願う。

(四六判 三五二頁 一九七八年二月 ヨル
ダン社 二、四〇〇円)
(中谷博幸 京都大学大学院生)

小池 滋著

『ロンドン』

——ほんの百年前の物語——

ほんの百年前にはロンドンは単にイギリスの首都であるにとどまらず、世界の経済・政治・文化の中心でもあった。また膨張が極度に急速であった反面、商業資本が支配し続けた点で、国内の諸都市とも相違していた。本書はこのユニークな都市、ロンドンのいわば案内書である。

各章の要約は以下の通りである。序章——大きなおできの町——では、ロンドンの急激な膨張が当時の人びとに異常現象と映った例として、コベットの「おできの親玉」(the Yew)という語が引用され、本論への導入となっている。第一章——逃れの町——では、ロンドンが名声を求める各国の音楽家・亡命中の作家や政治家・農村で食いつめた貧困者・世間の目を避ける者など、国の内外の逃亡者によってふくれあがった「逃れの町」の側面を持ったことが指摘されている。第二章——コヴェント・ガーデン盛衰記——では、ロンドン・シテイ膨張によって都市に取り込まれ、ロンドンの住民の生活に不可欠の機能を果たすに至ったコヴェント・ガーデンの実態が描かれている。すなわちコヴェント・ガーデン王立劇場・ロンドン中央警察法廷・青物市場、そして「ハمام」あるいは「バーニョ」と呼ばれるホテルが建ち並び、人びとの精神や心の欲求・食欲・性欲を満たしていたのである。第三章——スコットランド・ヤード交響曲——では、犯罪の蔓延に対処すべき警察制度の巨大化・近代化過程が、スコットランド・ヤードの歴史を中心に紹介

されている。第四章——犯罪者の監獄と貧困者の監獄——では、犯罪者監獄と債務者監獄の陰惨な実態とそれらの目覚ましい近代化が取り上げられている。第五章——薔薇と堆肥——では、「岸の労働者」「泥ひばり」・さらし屋・ごみ集め・煙突掃除少年・詩の大道商人・乞食・売春婦などの雑多な貧民が集中の登場している。著者はこれらの貧民をロンドンという大輪の「薔薇の美しさを保つ堆肥」であると結論している。

本書は著者も認める通り、一世紀前の「他人の見た」ロンドンの断片を集成した著作であり、一貫した論旨に導かれてはいない。また史料も多くを当時の詩や小説から得ていることから、史実の正確な描写とはいえない。しかし、どこまでを史料の範囲に含めるかの問題が残るとしても、莫大な史料から抽出されたこの一九世紀のロンドン像は、急激な膨張に間断なく揺さぶられ、万国博の栄光や世界一の都市の美名の陰で犯罪と貧困とに深く蝕まれていた往時のロンドンを髣髴とさせる。それは他に類を見ない特異性を持つ都市の姿でもあった。一方、本書にみられる犯罪・貧困に視点を

据えての都市研究は、産業革命期の犯罪に関する最近活発化した研究の動向からも注目される。さらに我国で最初にロンドンを限定的に取り扱った著作である点で、本書はイギリス史研究者にとって一読に値する書物であると言えよう。

(新書判 二二頁 一九七八年二月 中央公論社 四〇〇円) (江川志をり)

LA研究センター発行

『LA研究』四号・六号

本誌は、昭和四十六年創刊以来、すでに六号をかぞえるラテンアメリカ研究誌である。LA研究センターとは、関西在住の若手研究者有志約十名から成る研究グループである。各会員の専攻は歴史・文学・経済・政治と多岐にわたるが、マリアテギと土地制度史の二点を共同研究テーマとして随時読書会がもたれている。

マリアテギ José Carlos Mariátegui (一八九四—一九三〇年) は、ペルー、否、ラテンアメリカが生んだ最初のマルクス主義思想家であり、丁度五十年前の一九二八年

秋には彼によってペルー社会党(彼の没後、ペルー共産党と改称)が結成されている。

『LA研究』四号(昭和五〇年冬刊)は、彼の代表的著作である『ペルーの現実解釈のための七つの試論』(*7 ensayos de interpretación de la realidad peruana*, 1928)の第一試論(「ペルー経済概史」)と第二試論(「インディオ問題」)を訳出したものである。第一試論によると、当時のペルーには原始共産制経済の残滓・封建経済・ブルジョア経済という三つの経済要素が共存していたが、ブルジョア経済はヨーロッパの資本主義から「技術」だけを取り入れ「精神」をなおざりにした、創造性に欠けるものであった。

マリアテギがペルーの歴史的要変革主体に想定したのは人口の五分の四を占める「インディオ」(人種的概念ではない)である。第二試論において彼は、インディオ問題といわれるものが行政・人種・道徳・宗教・教育の問題ではなく実は土地問題であると結論づけている。これこそ彼のインディオニズモの精髓であり、被抑圧原住民系大衆の政治的経済的復権(原住民共同体の創造的再生)によるペルーにおける社会主義へ